

地域で始めたい！

子どもの学習支援 居場所づくり活動

～滋賀県内の取り組みから～



平成 27 年 3 月
滋 賀 県
社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会

はじめに



「子どもの貧困」という言葉がメディアにたびたび登場するようになってきました。生活困窮や社会的孤立の問題が深刻化している現代社会において、その環境によって低学力やいじめ被害者、不登校、被虐待などの状態になり、日々「生きづらさ」を感じながら暮らしている子どもたちは少なくありません。また、その子どもたちがその「生きづらさ」を蓄積しながら大人になった姿を想像するとき、そこに明るい姿をイメージすることは難しいという思いがあります。

そのような中で、子どもたちが現在直面している困りごとや、将来直面するであろう困りごとをキャッチし、「放っておけない」と、全国の様々な地域で子どもの学習支援・居場所づくりの活動がはじまってきました。滋賀県においても同様に、いくつかの地域で取り組みがすすめられています。

また、活動に後追いする形で、法制度も整備されつつあります。平成26年1月17日には、「子どもの貧困対策の推進に関する法律（通称：子どもの貧困対策法）」が施行され、平成26年8月29日に閣議決定された大綱では、福祉的な「支援」や「学習の支援」のみならず、地域や学校との連携や協働が内容に盛り込まれました。すなわち、狭義の「子どもの貧困対策」としての「子どもの学習支援事業」だけではなく、包括的に『子どもを地域ぐるみで育てていく』取り組みや体制づくりをすすめていくことが求められています。福祉や教育の専門家だけでなく、あるいは親だけで教育や子育てをするのではなく、まさしく「みんなで一人ひとりの子どもを育てていくために何ができるか」を考える時代になったのだと思います。



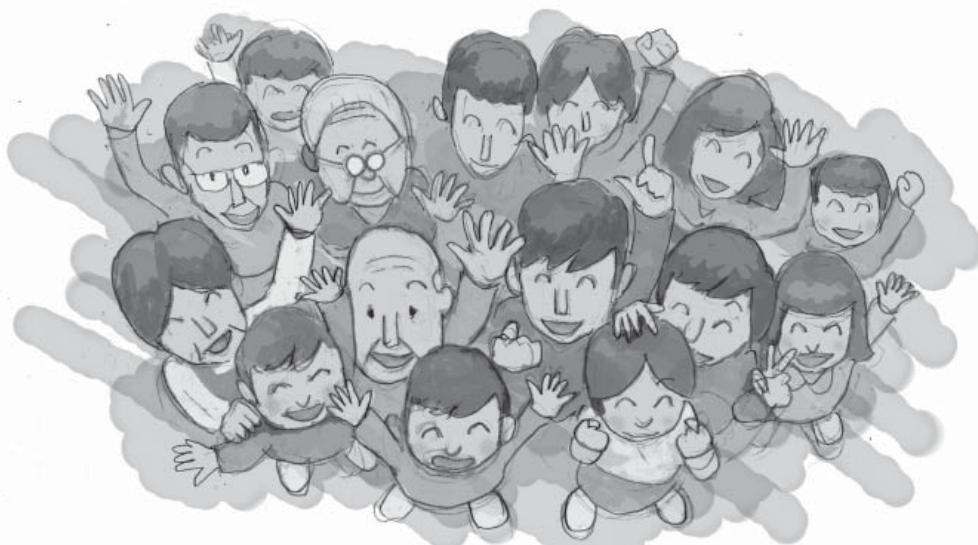
この冊子は、滋賀県内で子どもの学習支援・居場所づくり活動を実施されている方々へのインタビューと座談会の内容で構成しています。そして、単なる活動の紹介ではなく、その活動者の方々の“思い”に焦点をあて、全編にわたり語り書き形式でまとめました。その“思い”には、「生きづらさ」を抱える子どもたちを地域で育むためのポイントが数多く含まれています。

この冊子が、福祉や教育関係者のみならず、多くの地域の住民の方々の手に届き、「この子を放っておけない」という気づきや、「気づいたけれど何からすればよいのだろうか?」という状態から一歩踏み出せるヒントとなり、そしてそのことを通じて、「生きづらさを抱える子どもたちを地域ぐるみで育てていく」活動を推進する一助になれば幸いです。

平成27年3月

滋賀県

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会



目次



● はじめに	1
● 目次	3
● 実践事例	
守山市の取り組み	4
東近江市社会福祉協議会の取り組み	11
大津市社会福祉協議会の取り組み	20
NPO法人L i n k sの取り組み	30
● ★子どもを地域で育む取り組みのポイント★	
～滋賀県内の活動者による座談会から～	38
● まとめ	50

守山市が実施する 子どもの学習支援・居場所づくり活動

1. 事業概要

「守山市カンフォアラ第2の学校」を週1回夕方に実施している。初年度は小学生1人、中学生2人からはじまり、現在では小学4年～高校3年生までの子どもが約10人参加している。

①事業の位置づけ

生活保護受給世帯等学習支援事業（平成24年度～平成26年度）

②事業開始の背景

守山市内における「貧困の連鎖」をとめる活動の必要性を感じていた市生活保護担当職員が、大津市で学習支援事業に関わっていた「学習支援ボランティア団体Atlas」にボランティア協力の声をかけたことが始まり。

③ねらい

- ・子どもたちに居場所と出番を：
 - A. 子どもたちが「理由なく居ていい」と感じられる場所
 - B. 子どもたちが「理由があって輝ける（活躍・役割）」場所
- ・広い年齢層：
 - A. 早期からの支援
 - B. 子どもたち同士の学びあい育みあい
 - C. 高校生の中退防止と進路相談
- ・若者ボランティアが関わることによる強み：
 - A. 子どもたちとの斜めの関係、近い将来のロールモデル
 - B. （比較的）教科指導に長けている
- ・子どもの変化を通じた保護者の意欲喚起

④対象としている世帯や子ども

生活保護受給世帯およびひとり親家庭世帯の小学4年生～高校生

⑤実施主体

守山市健康福祉政策課

⑥関係団体

学習支援ボランティア団体A t l a s（ボランティア協力）

⑦実施時期

2012年（平成24年）1月～

⑧連絡先

守山市健康福祉政策課 電話 077-582-1123

勉強の様子



トランプは
鉄板です♪

2. 取り組みの特徴 ～犬丸智則さんに聴く！

★インタビューのお相手は・・・

犬丸 智則 さん（守山市健康福祉政策課 係長）

★きっかけ～事業実施まで

私はかつて生活保護担当ワーカーとして様々な世帯にかかわる中で、食事がとれていない子ども、意欲がない子ども、また複合的な課題を抱えている親など、「貧困の連鎖」を感じてきました。学校に行っても勉強についていけず中退したり、目標がない子どもと接する中で、「子どもが学べる場所、そして自分の夢や目標を話せる人、場所をつくってあげたい」という思いがありました。そんな中、「このことは行政として取り組んでいかなければならない大事な課題や」ということで、2011年8月から新しい事業実施に向けた検討を始めました。



まずは、子どもの学習支援事業にすでに取り組んでいる全国各地の取り組みについて、要綱等にくまなく目を通しました。そこからヒントを得ながら、事業として継続できるよう、「お金がかからない」「負担が少ない」ということを考えましたね。できるだけシンプルな要綱をつくりました。

上司が「これはええやないか」と賛同してくれ、とりあえずやってみようということはいよいよ動き出す段階になり、まずは協力してくれるところを探しました。そこでインターネットで見つけたのが、県内で子どもの学習支援に取り組んでいる「学習支援団体 Atlas」でした。このような活動をしている団体があるということも、この時初めて知りました。さっそく当時の代表に連絡を取り、趣旨を説明すると、当時のAtlasは子どもの「学習支援」が目的化し、「子どもの居場所」としての機能をもっと大事にしていきたい」と考えておられた時期だったんですね。「これだ」と思い、話をする中で思いが合致し、すぐに一緒に取り組むことが決まりました。



取り組みをすすめるにあたっては、「人」「場所」「金」が必要になります。この取り組みがスムーズに進んだ背景には、市が直接事業説明にまわる中で、関係機関や支援者等がこの趣旨をととてもよく理解してくれたということがあります。学校側も、「勉強やったら学校で教えてるやんか」というのではなくて、いろんな課題を抱えた世帯があるということも認識されていたので、子どもの“居場所”と

という趣旨に快く賛同してくれました。また、自転車の置き場所や時間枠の確保については、市のコミュニティホールが融通を利かせてくれました。ですので、他のところでよく困られているような、例えば教育委員会ともめる、場所でもめる、対象者でもめる、というのは現状も含めてまったくくないですね。

★子どもの呼びかけ

この事業の対象となる子どもは、第1期生としては生活保護受給世帯の小学6年生から中学2年生までとし、担当ワーカーと一緒に約10件の対象世帯を直接訪ね、親に説明をしました。中には、「学校で十分やれているので必要ありません」と断る親もいましたが、「嫌になったら毎回来なくてもいいし、時間も自由。勉強するだけの場所ではない」と根気強く声をかけたことで、第1回には3人の子どもが来てくれました。

この活動が始まって2年、3年が経ち、子ども自身が「中学を卒業しても行きたい」というようになったので、少しずつ対象を広げ、3年目では小学4年生から高校3年生まで対象にしました。現在は、生活保護世帯だけではなくひとり親

家庭にまで拡大しています。受け入れられる子どもの人数やボランティアの人数にも限りがあるので、ひとり親家庭については、市の「こども家庭相談課」との連携をはかり、より優先したい子どもを見極めて参加してもらうようにしています。とにかく「子どもが抱える課題が深刻になる前にかかわりたい」という思いがあるので、早い段階でこの活動につながってほしいと、これからもできる範囲で対象を広げていきたいと思っています。



★予算

この事業の予算は、厚生労働省の「セーフティネット支援対策等事業費補助金」を活用しており、ボランティアの交通費、保険料、会場代、ちょっとした書籍代だけを負担しています。補助金が打ち切られたとしても事業が継続できるように、経費面ではなるべく負担が小さくなるよう、運営に工夫をしています。また、活動が広まるにつれて、近くの司法書士が活動をのぞきに來られ、毎回お菓子の差し入れをしてくれるようにもなりました。こんな感じで自然発生的に広がる輪が、この活動を支えています。

★かかわるスタッフ

この「第2の学校」にかかわるスタッフについては、Atlasと協力し、まずは大学生のボランティアを募りました。教師を志望している大学生や、興味を持って参加してくれる大学生などが参加してくれました。大学生にかかわってほしいという思いの背景には、学校で教師との関係がうまくいかない子どももいるということ（子どもの教師アレルギー）や、自分と年齢の近い立場の人からいろんなことを吸収してほしいという思いがありました。この活動を知った教師のOBから「何か協力できることはないか」という声もありましたが、このようなことから、大学生がかかわるということに決めています。

★これからやろうという人へのメッセージ

実はみんな課題だと感じていて、何かやりたいという気持ちはずっとありましたが、一步を踏みだせない、目の前の仕事がいっぱいあって、手間やなと思ってしまうという職員も少なくなかったです。でも、そんな何から始めたらよいのかも分からないところから出発しました。今思えばようやったなと思いますし、ぜひ他の自治体にもやってほしいですね。今では全国から守山市の取り組みを知りたいと視察に来られますが、生活保護の担当ワーカーが支援策に行き詰っている自治体は多いと感じています。他の自治体からは、「誰がやるの」「反対されなかったのか」とよく聞かれますが、「地域の資源にちゃんと目を向ければ、できるはず。待っているだけではだめで、課題に気付いているのであればたとえ反対されても振り向かせる」ぐらいの思いがないと、この事業はできないと思っています。



また、Atlasがより支援の必要な子どもを見つけるためには、行政との連携は不可欠です。地域のすべての子どもを対象とすると「塾」になってしまうため、そういう意味では草の根のつながりだけで取り組みを始める難しさがあると思います。いずれにせよ、市の将来を考えて、この子どもたちが大人になって、守山市で働いて結婚して、子育てをしてくれたらこんなハッピーなことはないなと思います。こんな思いから始まるんやろうなあとと思います。

★子どもの変化に感動

この活動に参加している子どもの変化には、感動しますね。劇的に変わっています。自分から話などできなかつた子が、自分から人に声をかけ、意見が言えるようになり、さらに自分が高校生になると中学生に勉強を教えてあげられるようにもなりました。

また、変わるのは子どもだけではなく。子どもがあいさつをし、敬語を使うようになり、それを見た親が仕事を始めたり、市に相談をしてくれるようになったりと、世帯への支援の方法も変わってきました。子どもをきっかけに、世帯が変わる、未来が見える、ということ、この活動にかかわるスタッフはみんな実感しています。

そして、子どもたちは、自分の置かれている状況をよくわかっています。この活動に参加する中で、「生活保護を受けているから…」と下を向くのではなく、堂々と福祉を受けながら、子どもが自信を持って成長していけるようになりました。「(うちの親は)ここがあかんから仕事が续かへんと思うねん」と、子どもが自分の親のことを分析するようになるんです。家庭がすごく荒れている状態でも、本



当によく耐えて、学習会に来ている子どももいます。だから、何とか我々が守らないとあかんと思います。学習会では、そんな子どもがわずかに出すSOSもあります。そんな時は、いつもよりも10分、15分帰るのが遅くなっているんですよ（家に帰りたがらない）。ちょうどその時期が、家庭が荒れだしたころと重なり、子どもの夢や希望を守りたくて、親に話をしにいったりもしました。

★学習支援のこれから…5年後を見据えて

この活動を始めて3年。活動に参加していたある子どもが、ふらりと毎週金曜日に市役所に僕を訪ねてくるようになって、1対1で市役所のロビーで相談に乗るようになりました。そこで、のどが渴いたとか、鉛筆忘れたとか言いながら勉強や雑談をするんです。その子は、周りの人に見られていることは気にならないみたいで、この光景をみて他の担当課の職員や市民が「中学生と何喋ってたん？」と聞いてくるわけです。そこで、「子どもにこんな支援してるねん」ということを伝えるのですが、このことが庁内連携につながっています。どこでどう絡むか分

からないので、「知っておいてもらう」というのが大事やなと思います。ただ単に「やっています」の説明アピールでは響かないけれど、実際の現場を見て「いいことやな」と感じてくれた人たちが応援団になって、サポートが増えていくというのを実感しています。

今後は、より子どもの日常に近いサポートができるよう、例えば月曜日はボランティア主導、金曜日は行政主導で簡単な勉強会を開催するなど、新たな展開を考えています。

そして、この活動にかかわる大人は、今参加してくれている子どもたちが、卒業してもボランティアとしてこの活動に戻ってきてくれる、そんな関係が続くように願っています。また、直接子どもの声や思いを感じられる場所は、行政にとっても財産であり、これからの取り組みへのヒントがいくつも浮かんでいきます。市役所の仕事で、これほどやってよかったという仕事はありません。目に見えて成果が見えるし、何より子どもが自分を頼ってくれるのがうれしいですね。地域には、課題を抱えながらも声をあげられない人、自分でも課題に気付いていない人たちがいます。そんな人たちにとって、この第2の学校が、『いつ来ても誰かがいて、安心できる場所』であればと思います。



ハロウィン
イベントは
大盛況！



東近江市社会福祉協議会が実施する 子どもの学習支援・居場所づくり活動

1. 事業概要

平成26年10月末現在、市内2か所それぞれ週に1回夕方に実施し、主に中学生が参加している。初年度から参加していた子どもが高校進学後も参加している。

①事業の位置づけ

貧困の連鎖を防止するための取り組みとして、生活困窮者自立促進支援モデル事業（東近江市委託事業；平成25年度～26年度）として実施

②事業開始の背景

生活保護ケースワーカーや地域包括支援センターへの聞き取りから、複合的課題を抱える世帯の実態や貧困の連鎖の実態に触れ、生活困窮世帯の子どもへの学習の場や将来の自立に向けた支援の場の必要性を感じたため。（平成24年度策定の東近江市社会福祉協議会地域福祉活動計画の中で、相談支援活動の充実を目指して平成25年度から事業実施予定であった。）

③ねらい

- ・子どもたちの居場所となることを最大の目的として支援を行う
- ・学習習慣の獲得
- ・大学生ボランティアが関わることによるロールモデル
- ・認められる経験、生活体験
- ・市との連携を通して、子どもの頑張りを通じた保護者の就労意欲・生活意欲獲得につながる場
- ・大学生ボランティアに地域への愛着を持ってもらったり、生活困窮者を排除しない地域づくりへの学びの場としてもらうこと

④対象としている世帯や子ども

市役所の自立相談支援事業でかわりが必要と判断した市内在住の生活保護または生活困窮世帯の中学生・高校生。

⑤実施主体

東近江市社会福祉協議会が、市内在住の大学生ボランティアを支援スタッフとして実施。

⑥関係団体

市いきいき支援課くらし相談支援グループ（自立相談支援事業担当）や生活保護担当課、学校との連携により、世帯全体への支援や、子どもの置かれている状況、子ども自身の変化を密に情報共有して支援にあたる体制をつくっている。

⑦実施時期

2013年（平成25年）11月～

⑧連絡先

東近江市社会福祉協議会 電話 0748-20-0555（地域福祉課）

大学生と一緒に
勉強します



夜食のおにぎりを握っています♪

2. 取り組みの特徴 ～担当のみなさまに聴く！

★インタビューのお相手は・・・

眞弓 洋一 さん	(東近江市社会福祉協議会)	地域福祉課長)
田中 光一 さん	(東近江市社会福祉協議会)	地域福祉課主任主事)
金子 泉美 さん	(東近江市社会福祉協議会)	地域福祉課主任主事)
谷 和之 さん	(東近江市社会福祉協議会)	地域福祉課主事)

★取り組みのはじまりについて

生活保護ケースワーカーへの聞き取りが大きなきっかけでした。世帯状況が本当に厳しい中、例えば子どもは着替える服がなく、学校でいじめられて帰って遊ぶ友だちはいない。ケースワーカーが訪問すると、サッカーボールをもって待っていて、行くと喜ぶ。ケースワーカーは「一緒に遊んでもええのだろうか」と悩んでいる。一方で、平日に子どもが家にいても親が「学校に行け」と言わない。大人のモデルが親しかいない中で「自分も将来は生活保護もらいながら生活するものだろう」と思っている。これって（貧困の）連鎖ですよ。子どもたちは将来について、自分で描いたものより、受け入れるしかない運命のように思っているのではないかな。あるいは、本当に少ない経験の中から将来の夢を見出すわけですが、比較対象がない中で、すごくハードルの高い夢を描きますよね。だから壁にもぶつかり易くて、「できなかった」とふさぎ込んでしまう。夢を現実近づけていくための努力の仕方が分からない。でも僕らからすると、それはきれいごとのように聞こえますが、彼らにとって初めて描いた夢なんですよ。



★夢を語り始める子どもたち

大学生ボランティアとの何気ない会話の中で、「なんで勉強せなあかんの？」という問いが出てくるようになりました。そのことに答えながら、逆に「なんのために高校に？」「将来どういう風になりたいの？」という声かけをしていきました。それに対して子どもたちは自然にそのことへの自分なりの答えをしていました。大学生の力の大きさを感じます。ある子は、「いじめられていた時に心理カウンセラーに支えられた経験があり、将来そんな人になりたい」と語っていました。大学生ボランティアは、「この子はだるいから学校行かない、勉強



しないのだと思っていたが、実はこんなこと考えてたんや」と、驚きと感動をしたようで、この子のために何かしてあげたいと、思いを強くしたみたいです。

★職員の強みや役割について

大学生は「勉強はやりたいときにやったらいいよ」と、促し方、距離の縮め方が上手ですよ。歳が近いからこそできる強みがあります。一方、大学生が関わられるのは、学習支援の現場のみ。職員はケース会議など、様々な機関と子どもの支援について考えます。例えば学校とのケース会議を通して、「学校のスタンスがこうだから、学習支援の現場はこうしよう」という提案もできます。学習支援と学校でスタンスに差があると、子どもたちに負担がいくので、連携し、情報を把握しておきたいですね。

もちろん現場では一緒に勉強もするし、クリスマス会等の企画も盛り上がります。また、職員だと子どもや世帯の様々な変わり目に関わられますよね。例えば中間テストの時期などを大学生に伝えるなど、職員は意識しています。小さい目標を立てて、促す役割ですね。そこに、大学生の気付きをミックスするのも職員の仕事です。

子どもと大学生ボランティアとの間だけでなく、行政や学校など、間をつなぐクッション役として私たち社協がいるのは強みだと思います。生活困窮者支援として、世帯全体を支えている中で子どもの部分をうちは担っているということ

ですよ。他機関との連携の中で世帯の情報がたくさん入り、暗い話も多いですが、そこを知っているからこそできる支援があります。子どもの思いを聴いて親に伝える行政の職員がいたり、社協職員が学校に伝える場面があったり、その中で、学校で見せている姿と学習支援で見せている姿の違いや、大学生ボランティアと関わる子どもたちの姿を伝えていけるように、その場をうまく回せるようサポートすることが私たちの役割だと思います。



★世帯まるごと支援の一つとしての 「子どもの学習支援」の位置づけについて

「子どもの貧困」といっても、子ども一人が家の中で貧困なわけではないですよ。世帯が困窮している状況から脱却するための一つの支援のツールが学習支援

であり、世帯まるごとを見ないと、いくら学習支援の現場だけ、子どもだけが良くても、子どもはギャップに苦しみます。お兄ちゃんには就労支援、親は家計相談支援が入るなど、世帯みんなを建て直していかないと。世帯情報がない中で子どもに夢を描かせ、将来の生活の目途をつけようとしても、余計に大変ですよ。子どもが変化すればするほど、親の変化を知りたくなるので、生活保護や自立相談支援担当に確認し、向こうも変化を伝えてくれます。あくまで生活困窮世帯の自立支援ですよ。大学生もそう感じている気がします。週1回2時間だけで子どもに自立する能力がつくわけではないですから。

★子どもと大学生ボランティアの 双方向な関係について：共鳴・共に成長

世帯や子どもの状況について、深い部分まで大学生も知りますが、「もう私にはできません」と言う大学生はいないですね。むしろ、「なにができるやる？」と悩みながら関わってくれています。そういう意味では、社協としては、学習支援を通じた大学生への福祉教育の意味も大きいのだと思います。支援している大学生が悩みながら、辛いことを共有して、どうしたらいいのか、大学生の段階で知って大人になっていく。徐々に、「この子にはこうしたらいいのね」と、自分の言葉で自分の意見を語れるようになってきています。大学生の方が成長している。また、子どもが夢を語り始めると、大学生も自分の将来を子どもたちに語るなど、共鳴している感じがありますね。大学生は迷いながらも、子どもたちの少し前を歩いています。決して上からじゃない関わりができるのは、お兄ちゃんお姉ちゃんの強みですね。

以前、大学生に社協の仕事のことを聞かれた際、私たち職員の答えを中学生もしっかり聞いていました。どういうことを思って聞いていたんでしょうね。大学生の悩みを聞いて、「自分も将来考えな」と、身近に感じたのかな。大学生の「いくつ受けて、いくつダメだった」という就職活動の話が子どもが聞けることも大きいですよ。何回も努力をして結果がついてきた人が近くにいれば、「1、2回ダメでも落ち込んでいられない」ということを学ぶのではないかな。



★意思表示ができる場、意欲の認められる場に

勉強の苦手な大学生の存在もプラスになっていて、例えば「中学の時の成績2ばっかりやった」と大学生が語ることで、「それでも大学いけるんや」と子どもたちが妙な身近さを感じて距離が縮まります（笑）。他方、参加している子どもって勉強嫌いじゃない子が実は多いんです。ついていけない、分からないから、面白くないということなんです。学習支援で教えてもらって数学が好きになった子もいて、それを聞いて大学生も更に頑張ります。

「分からない」ことは意欲を奪っていきます。学習支援では、その「分からない」を素直に聞ける環境になっているのかな。「分からないことを分からない、したくないことをしたくない」と意思表示ができる場ということですね。事前情報では、子どもたちの大半は「意思表示をしない」という話でしたが、全然そんなことはないんです。自分の意思も想いも持っています。その意思や想いを認められる環境が大事ですよ。



★他機関との連携を通して、 大人みんなで応援する雰囲気！

貧困世帯の子どものイメージは、荒んでいるというよりも、相当ピュアで傷つきやすい。彼らが学校で見せる顔と学習支援で見せる顔とは大きく違っていて、学習支援で騒いでいる子が学校ではぼーっとしていたり、学校では不良グループの子が学習支援では大学生に「そんなことないですよー」とはにかんだり。どちらもその子には変わりないでしょうけど、例えばやんちゃしている場合は環境がさせているのかとか、逆ににはにかめる環境との違いはなんだろうとか、それぞれの場で見せているものを大人が情報交換して、ここでは認められるけどあそこでは認められないという子どもの感覚のギャップを大人が埋めいくこと、その子らしさや良さが見えるような環境をつくっていくことが大事ですね。共有したことを「先生から聞いたでー」と伝えると、「先生と会うんですか!？」と子どもも反応しますが、そういう中で、子どもたちに見守っている人がいることを感じてもらうとか、誰もが「高校行くんやろ、あの学校狙うんやろ」と、その子が言ったことを認め



て、大人がみんなで支援してるという雰囲気をつくれたら、「自分の想いを出したら応援してくれる人もいるんや」と子どもたちも感じてくれるんちゃうかな。

必ずしも方向性が一致している訳ではないですが、そういった子どもの様子を共有する場が増えてきたことは大きなことです。例えば生活保護のワーカーが子どもの変化を知り、「子どもも頑張ってるんやからあんたも頑張れよ」と親に言えるようになったり、子どもが高校に行きたいといったとき、費用面で大学生が「その高校に行くことを推してもいいのか」と悩んだ時、生活保護のワーカーに確認をし、GOサインが出ると、そのことで大学生も子どもも「あの高校を目指していいんや」と心配がとれ、前向きになれますよね。

★様々な大人と出会う場を

子どもたちのすごさを感じる場面は多いです。「生活困窮家庭の子といってもダメな子ではないぞ」「じいちゃんばあちゃんが何でも与えてくれることが恵まれているわけではないぞ」と、支援に関わったことのない大人に伝えていかんとね。学習支援や居場所で子どもたちに何を伝えるか、実感してもらうか、大人たちは何をしていかんとあかんかを見つける場所やと考えてるうちみたいなところと、学力とか学習習慣をつけることが子どもの自信や生きる力につながると考えているところとは当然違うし、どっちが正解でもないと思う。取り組みごとにアイテムが全く違うし、うちは大学生である強みもある。うちとしては、あとは勉強のできる温なおじいちゃんの先生がいるとええかなと思う。何にしても、子どもたちが色々な人と出会える場にしていきたいですね。大学生と教育像のがっちりした先生が「学習支援とは何ぞや」と戦う場面があっても面白いかも。



また、学習支援の会場を管理されているおじいちゃんおばあちゃんの存在も大きいです。子どもらも違和感なく、「はい」と返事してるし、「気づけて帰りやー」という言葉に「ありがとう」と返しています。職員には「分かってるわー」としか言わないのに…。やっていく中で少しずつ、「もっとこんな人がいれば…」が見えてきます。子どもたちから「それでも仕事になるんや」といじられている職員が違う仕事をしている場面を見ることで子どもの持つ印象が変わったり、市役所の上の立場の人と話したり。子どもたちにとって、しんどいときこそ、いろんな大人と会えたらええんやろね。

★イベントの効果と認められる感覚

ハロウィンやクリスマス等、季節行事は大事にしています。お菓子を食べたり、1時間勉強せずに話をするくらいですが、プチイベントに子どもは喜んでますね。「来週イベントするから今日は勉強頑張ろや」と、大学生が促しやすいこともメリットかな。なにせよ、そういう経験のない子どもたちなので、一回覚えるとイベント好きになります。学習支援でのクリスマスパーティが生まれて初めての子がいたり、「焼肉、焼肉」と言いながらも具体のイメージがわからない子もいましたね。イベントをみんなでする面白さを感じたり、勉強以外の体験・スキルが積み重なることって大事ですよ。大学生も喜んで子どもたちより先にケーキに手を伸ばしたりするのですが、その奔放さが良い部分でもありますよね。このあたりの支援のスタンスは大人じゃできない。対等な感じだから、子どもたちも色々なことを打ち明けやすい。私たち職員も上からとは思っていないですが、大学生よりは近づくのに時間がかかります。



こういったイベントの中で、普段はどちらかという真面目でしっかりした子が、ホットケーキやたこ焼きの中にわさびをいれ、それをわざと目上の人に食べさせるというイタズラをするようになるなど、違った一面を見せるようになっています。その子は、大学生からの「この中学生の勉強見てあげてくれん？」という促しに応えてくれたり、支援者側のスタンスにもなってくれています。その子はなにがあっても学習支援に来ようとしてくれていて、大学生が「何が良くてこんなに毎回来るんやろ?」「私たちは応えられているのだろうか?」と悩んでいたくらいです。やはり、「自分は誰かに認められている」感覚って大事なんですよ。

★来年度以降に向けて：職員が語る夢！

○現在中学三年生が多い中で、この子たちが希望する高校にすすめていることが一番の夢ですね。そして進学後も、今来ている高校生と同じように、定期的に顔を出して、学校の様子とかを語ってほしいな。

○どちらの会場も大学生スタッフは子どもと向き合ってくれていると感じています。大学生自身が、その思いを後輩につないでいてほしいですね。何より子どもたちが居心地の良さを感じてくれていると思うので、それを引き続き大事にしたいです。そして、卒業した子が、「何か自分にできるかな」とふらっと立ち寄っ

てくれたり、居場所として来てくれたらいいなと思います。また、今は2会場ですが、そういった居場所を広げていくことも考えていきたいですね。地域の人に関わってくれる形もいいですね。

○子どもたちも大学生も東近江に残ってほしいです。経験を地域に伝えるキーマンとしてその輪を広げてもらえたら嬉しいですね。10年先かもしれないですが、もしそうなったら、貧困の連鎖を止められるモデルになっているということだと思います。この地域のために頑張りたいという人が増えてきたら。

○大学生ボランティアがこの3月で初めて卒業する年になります。この学習支援には大人として行きたくなる何かがあって、大学生が就職した後も、勉強を教えに行くというより、何かがあったとき、しんどくなったときにホッとしにくる、そんな場になってもいいかなと思います。働き始めてしんどい思いをして、ゴールデンウィークくらいに泣き言を言いにくるとか、そんなのがあってもいいな。そんな大学生の募集を職員が行うだけでなく、例えば授業一コマもらって同じ大学生の立場で呼びかけをする形もいいですね。今来てくれている大学生のモチベーションを考えると、もっと大変な家の子も受け入れられると思うので、もう少し自立相談支援担当に言ってもいいかなという感じはしますね。

○高校生のバイト等、外の世界に向けたサポートもやりたいなと思っています。いい大人と出会う機会をもっとつくりたいですね。いずれは巣立っていくわけだから、自分の進みたい行き先へ、自分で行く勇気を持ってもらいたいな。「いつでも帰ってきてもいいよ」と。きっと帰ってくるだろうしね。でも自分で歩くことも覚えてもらいたいですね。自分の足で歩いて自分でこけて、自分で帰ってこんな。



夏祭り
焼肉しました！

大津市社会福祉協議会が実施する 子どもの学習支援・居場所づくり活動

1. 事業概要

- (1) トワイライトステイ
- (2) 寺子屋プロジェクト

(1) 夕方から夜の子どもたちの居場所づくり 「トワイライトステイ」

開設当初は1か所、高校生2名の参加。平成27年3月末現在は3か所、小学生～高校生の年代の子ども7名に広がっている。大学生ボランティアも延べ100名以上が協力。

①事業の位置づけ

貧困の連鎖を防止するための取り組みである、生活困窮者自立促進支援モデル事業（大津市委託事業：平成25年度～26年度）として実施

②事業開始の背景

トワイライトステイの実績のある専門職との出会いと、生活困窮者自立促進支援モデル事業にかかる子どもの学習支援事業の受託を受けたことが始まり。

③ねらい

- ・夕方から夜の居場所づくり
- ・学習支援
- ・自己肯定感の向上
- ・食の確保
- ・異年齢、地域とのかかわり
- ・ボランティア同士の交流

④対象としている世帯や子ども

市社協の総合ふれあい相談や市役所（子ども家庭相談室、生活福祉課等）の生活相談、学校でかかわりが必要な生活困窮のおそれのある子ども、若者

⑤実施主体

以前より子育て・子ども支援の活動を積極的に進めておられる、幸重社会福祉士事務所、NPO法人あめんど、NPO法人CASNの協力で実施

⑥関係団体

龍谷大学及び大学生ボランティア（ボランティアグループ「トワイライトホーム」）、小中学校、行政 等

⑦実施時期

2014年（平成26年）1月～

⑧連絡先

大津市社会福祉協議会 電話077-525-9316

みんなで食卓
を囲みます



(2) 長期休暇中の学習支援・居場所づくり 「寺子屋プロジェクト」

大津市内7学区で、平成26年度の夏休みに32回、冬休みに11回の寺子屋事業を実施。延べ約800名の子どもたちと延べ約500名のボランティア、スタッフの参加があった。

①事業の位置づけ

貧困の連鎖を防止するための取り組みである、生活困窮者自立促進支援モデル事業（大津市委託事業：平成25年度～26年度）として実施

②事業開始の背景

すでに地域発で寺子屋プロジェクトがはじまっていたことと、生活困窮者自立促進支援モデル事業にかかる子どもの学習支援事業の受託を受けたことが始まり。

③活動内容

- ・長期休暇中（夏休み、冬休み等）の宿題支援（作品作りのお手伝い）
- ・野外活動（自然体験、思い出づくり）
- ・工場見学（休み中の日記、思い出づくり）
- ・調理実習（一緒につくって食べる）
- ・書初め、かるた大会など地域によりメニューはいろいろ

④対象としている世帯や子ども

学区内の小学生、中学生

⑤実施主体

大津市内の各学区社会福祉協議会（平成26年度は7学区が実施）

⑥関係団体

小中学校、PTAをはじめ、学区社会福祉協議会の構成団体

⑦実施時期

2014年（平成26年）7月～8月（夏休み期間）および12～1月（冬休み期間）～

⑧連絡先

大津市社会福祉協議会 電話077-525-9316

夏は水浴び♪



2. 取り組みの特徴 ～井ノ口浩士さんに聴く！

★インタビューのお相手は・・・

井ノ口 浩士 さん（大津市社会福祉協議会 地域支援グループリーダー）

★大津市社協での子どもの学習支援や居場所づくりの取り組みのはじまりを聴かせてください。

大津市社協の子どもに関する活動については、これまでファミリーサポートセンターでの小さい子どもへのかかわりと、小学校や中学校での福祉教育にボランティアグループが関わる程度でした。今回この学習支援に取り組むきっかけになったのは、生活困窮者自立促進支援モデル事業を市から受託することになったのがひとつです。

そこでモデルにしたのは、唐崎学区社協の取り組みでした。唐崎学区社協では、平成25年度の夏休みに「寺子屋プロジェクト」という名前で初めて学区の小・中学生を対象にして夏祭りでプリント学習を始められました。これは学区の地域福祉活動計画づくりのなかで、地域の人や専門職の声を拾うと、「学区社協は高齢者の活動が多いな」という声があり、「それではあかん」ということで、25年からスタートしておられました。

もうひとつのきっかけは、ゆきしげただたか幸重忠孝さん（幸重社会福祉士事務所代表）との出会いです。県社協で開催された2013地域福祉活動フォーラムで幸重さんが子どもの貧困の話がされました。その話を聞くなかで子どもの取り組みを大津でも始めていきたいなと感じたのがスタートでした。

大津市では中学3年の学習会を以前より行政がしていました。これまでは市社協がかかわることはなかったです。モデル事業を受けるというので、数ヶ月一緒に毎週参加させてもらい、中学3年の学習会を地域のなかでできないかと考えましたが、地域の声は、「それは無理や」ということでした。「中学3年生を教えるには大学生やそれなりの専門の人しかできないし、学区では対応できません」。そういう声も受けて、私たちができるのは行き場所のない子どものための居場所づくりではないかということで、大津市社協ならではの夕方から夜のトワイライトステイ事業が固まったわけです。



こんな風に、「寺子屋プロジェクト」と「トワイライトステイ」の2つの子どもの学習支援事業がスタートすることになりました。

地域から声があがっていたことと、専門職との出会いがあったこと、そして大きなモデル事業が来たことが、大津市社協が新しい方向に進む転機となりました。

★井ノ口さんが、地域福祉をしているものとして「ほっといたらあかん」と思ったのは？

フォーラムでの幸重さんの話は大きかったです。相対的貧困の話。子どもの貧困の話。目に見えないしんどさを抱えた子どもたちが身近にいる話など。自分自身の子育ても含めて考えさせられる話で、私の何かが動きだした感じです。それまでは、生活困窮者自立促進支援モデル事業全般として全国の事例を聞いたり、研修会に参加したりしていたけど、フォーラムで幸重さんの話を聞いた瞬間から「学習支援や！」とスイッチが入りました。

子どもの貧困については、中学3年の学習会を終えた子どもたちと出会うなかで、地域の中で親の理由でしんどい思いをしている子が多いことを実感しました。今までは全然見えていませんでした。見ようとしていなかったのかもしれませんが。

生活保護の世帯数や、ひとり親家庭の数等を聞いてはいるけど、あくまで数字の上での話でした。この事業をすることで、実際の子どもたちの顔とつながり、「何とかしたい」という意識に変わりました。

社協の地域支援グループ内の若手職員もこの活動に関わっています。彼らはコミュニティソーシャルワーカーという専門職の立場だけでなく、この子、この家庭のことを「ほっておいたらあかん」、「何とかしたい」と心が動いた職員で、そういう熱い気持ちで動けるのもまた大津市社協の良いところですね。熱い思いを共有し、つなげ、具体化できる。またそれを認めてくれる上司にも恵まれました。費用対効果でいうと数値として表しにくいのですが、それ以上に大きな効果があります。子どもの変化、家族の変化、職員の変化、そして何よりも地域の変化、これがこの事業を受託した何よりの効果だと上司も言ってくれますし、私たちもやりがいがあります。ひとりの困った問題に丁寧にかかわり、地域の課題にしていく、これこそ社協の仕事です。

★トワイライトステイの取り組みのなかで大津の強みと思うことは？

大津市社協のネットワーク力と連携の強さではないかと思います。幸重社会福祉士事務所や、龍谷大学、大津市行政との関係が、この事業の大きな力となりました。そしてそこに、NPO法人あめんどやCASNが新たにチームに加わって

くださる。それぞれはずっと子育て関係の活動をされていたので、今回ネットワークを組もうということになりました。もともとこの生活困窮者自立促進支援モデル事業は、「地域づくりとネットワークづくり」が大事なキーワードだということでしたので。

龍谷大学の町家キャンパス「龍龍」をお借りし、畳やこたつがあるだけで、社協の会議室では味わえないぬくもりのようなものがあり、参加する子どももボランティアもゆったりとできて、距離が近づく気がしています。

NPO法人あめんどやCASNでのトワイライトステイでは、地域のボランティアさんも参加してくださり、やっぱり温かいです。

大津市社協が大切にしているトワイライトステイの6つのねらいは、①夕方から夜の居場所づくり、②学習支援、③自己肯定感の向上、④食の確保、⑤異年齢や地域とのかかわり。大学生のボランティアと関わってもらうことで子どもたちも育ちます。自分の近い将来の姿が見えるのやと思います。⑥ボランティア同士の交流、これも大事にしています。ボランティアが勉強だけを教えに来て帰るのではなく、ボランティア同士が助け合う、仲良くなる、そういった交流の場の意味も大きいです。ボランティアもつながることで継続性ができます。このように学習支援と居場所づくりを大切にしながらやっています。

そんなトワイライトステイも、皆さんのかかわりの中で、温かな居場所になっています。

子どもたちが子どもらしくいられる温かな場。勉強を一对一で見てもらえる場、子どもたちがわがままを言える場。温かなご飯を食べられる場。安心できる温かな場です。



★ネットワークをひろげていくことについて

ネットワークについては、寺子屋プロジェクトでも同じことが言えます。

学区社協の寺子屋プロジェクトでは、役員は地域福祉活動の中で、住民や学校、教師のOB、大学生、地域の名人さんにつながっておられます。

子どもの生活環境がこれからも変わるなかで、ニーズもめまぐるしく変化し、1機関や個人では支えきれないようになります。そこでネットワークをひろげていくことで、助け合い・支えあいが生まれ、活動が継続していけるのではないのでしょうか。若者が自分の居場所を見つけるのは難しいです。高校を中退すると所属すらなくなってしまいます。そんな中で社会と細い糸でなんとかつながっている状態の子どもたちの居場所をつくっていくには、様々な機関や専門職、地域がつな

がっていくことが大切になります。

たとえばトワイライトステイでみると、何らかの理由で高校通学が続けられない子どもたちに、いつまでも温かな居場所だけではなく、NPO法人あめんどとのネットワークのおかげで、就労体験や農業体験に参加することもできます。またそこに福祉施設や企業とのネットワークがあれば、その体験はもっと広がります。私たちがネットワークを広げることで、子どもたちも、支援者側も新たな1歩を踏み出せます。

★寺子屋プロジェクトを学区社協が行うということ

もともと大津市の特徴は、地域福祉の基盤が学区社協にあることです。寺子屋プロジェクトはそんな学区社協が中心となって、地域発の事業としてスタートしました。実施されている学区社協の皆さんは「楽しい」と言ってくれます。学区全体が元気になっていく気がします。今年度は、地域で何か子どものことをやりたいなと思っておられた7学区社協でやっていますが、来年度は15学区での開催を目標にしています。

実施学区社協会長はそれぞれ熱い思いをもっておられ、地域の子どもは地域で見守り育てていく大切さや、生活困窮者支援という以上そこを大事にと思いながら、困窮家庭の子どもだけをピックアップできない歯がゆさを感じていたり、「ほんまに勉強だけでいいんか」などの熱い議論の中から、幸重さんのアドバイスもあり「居場所づくりと学習支援が大津らしさやな」という声が大半になっています。

夏休みだけで延べ35回、約650人の子どもたち、約400名のボランティア・スタッフがかわり、冬休みは延べ11回、約150人の子どもたち、約100名のボランティア・スタッフがかかりました。生活困窮の事業や子育てについて、地域のことなどを考える人があわせて延べ500名に増えたということがうれしいです。

また、学区ごとに子どもへの呼びかけ方も活動内容も当日のやり方も工夫されていて、「居場所づくりと学習支援を大切にするなら、継続が大事やから続けていかなあかん」という声もありました。

学区社協にとっても、子どもよし、親もよし、地域よしです。今まで学区社協の活動にかかわりのなかった若いお母さん世代が知ってくれたこととか、PTAの人が協力してくれたこととか、地域で子どもから声をかけてくれるようになって



たという喜びの感想も届いています。



★寺子屋プロジェクトで大事だと思うことは？

寺子屋プロジェクトには何らかの支援の必要な家庭の子どもも来ています。始めるときに幸重さんからもアドバイスがあって、学区社協の活動で生活困窮の子どもをしぼるのは難しいし、勉強を本格的に教えるのも難しい。まずは居場所づくりということで子どもに声をかけて、そのなかで「なんかちょっとしんどそうやな」、「なんか問題がありそうやな」と、だんだん子どものことがわかってきます。その子らを大事にしてほしいとアドバイスをいただきました。学区によってはひとり親家庭にチラシを持っていったり、生活保護のケースワーカーを通じてチラシを渡してもらったりという工夫をされたところもあります。学童保育と連携することを大事にしている学区もありました。続けていくなかで、気になる子ども



も出てくるだろうし、子ども同士で支援が必要な子を連れて来てくれることもあるだろうと思います。主任児童委員をお願いしながら、アプローチしてみようかという学区もありました。生活困窮がベースにあることは学区社協の役員もわかっていますが、それを表に出すのは難しい、広報にも生活困窮とは載せにくいので、子どもの学習支援ということでPRしているという工夫も見られました。

地域の子どもをみんなで大事にする、そのことが家庭の状況や本人の状況がしんどい子どもたちを大事にすることになると考えています。この夏や冬の取り組みのなかでも、支援の必要な子が来ていて、その子どもたちにどうやって上手にかかわっていくかを相談し、工夫しておられました。やり方に正解はありません。学区によって意識も違います。学区社協を知ってもらえる良い機会でもあり、この事業をして得るものは学区によって違いますが、やっていくなかで次の課題を見つけていくのだろうと思っています。

★大津市社協にとって、これらの取り組みは何をもたらしましたか？

トワイライトステイと寺子屋プロジェクトという2つの子どもの学習支援事業を通して、ネットワーク型と地域福祉型の実践を行えたことが大きな成果です。

専門機関や専門職と連携しながら進めること、地域からの声やニーズを地域が中心となって形にしていくこと。まさに社協が目指し、大切にしている活動でした。

また、社協の地域担当職員やコミュニティソーシャルワーカーを育てる大事な事業になると実感しています。立ち上げのところからしっかりとかわることの大事さは、こういった創造的な事業でないと実感できません。

★これからのこと

今回の子どもの学習支援事業を、モデル事業だけに終わらせないように、見せて（報告して）いく必要があります。見せて（報告して）いくなかで職員の意識が変化しますし、関係機関に見せる（報告する）ことでよりネットワークの輪が広がります。行政に見せる（報告する）ことで事業予算獲得につながりますし、地域に見せて（報告して）いくことで事業の担い手と応援団が増えていきます。

まずは見せて（報告して）いくこと、魅力を発信していくことが、モデル事業を実施した我々の責任ではないかと考えます。



トワイライトの
夕食は
いつも行列
です♪

NPO法人L i n k sが実施する 子どもの学習支援・居場所づくり活動

1. 事業概要

彦根市の小・中・高校生を対象に、「学び育ちLL教室」を週1回（月4回）夕方に実施している。10数名の生徒が参加し、初年度から参加していた子どもが高校進学後も参加している。

①事業の位置づけ

法人の自主事業

②事業開始の背景

PTAアドバイザーの方から「中学3年生で5教科が100点未満の子がいる。なんとかできないか。」という相談を受けたこと。

③ねらい

- ・ 何らかの理由で学習機会を得られなかった子どもたちに学びの機会を提供すること
- ・ 子どもたちが、歳が近い大学生や社会人と接することで、家族や学校以外に気軽に相談できる年長者を持つことができる場を創ること
- ・ 子どもたちが、将来の自分のロールモデル（見本）を見つけることができる場とすること
- ・ 学校以外での居場所として、悩みを相談できる場所になること
- ・ 事業を継続していくことで、教室で学んだ先輩が後輩へ教えるという地域での年齢を超えた学びの循環をつくること。

④対象としている世帯や子ども

何らかの理由で学習機会を得られなかった子どもたち

⑤実施主体

NPO法人L i n k s。大学生サポーターと社会人サポーターが半々で構成されている。

⑥関係団体

中学校・公民館・大学

⑦実施時期

2013年（平成25年）2月～

⑧連絡先

NPO法人L i n k s

メールアドレス shibatamasami2.0@gmail.com （代表：柴田雅美）

みな真剣に勉強
しています！



たくさんの
教材を準備

2. 取り組みの特徴 ～代表 柴田雅美さんに聴く！

★インタビューのお相手は・・・

柴田 雅美 さん（NPO法人Links 代表理事）

★取り組みのはじまりについて

NPO活動のつながりで、学区のPTAアドバイザーから、「あるひとり親家庭のお子さんで、中学三年生のお兄ちゃんが五教科で100点いかに進学に不安を抱えているのだが、何かできないか」という相談を受けました。平成24年10月のことです。そのアドバイザーは独自で取り組みの開始を考えておられたのですが、担い手がおらずに動き出せない様子でした。私は仕事の関係で周りに大学生がいたので、2月中旬からモデル的に取り組みをスタートできました。その時は、子どもたち三人が参加しました。



会場をどうしようというところで、公民館の館長に相談したところ、「月曜日の夜なら無料で使っていいよ」と言ってくださり、スタートできました。その館長は学区在住の方で、かつ地元で商店をしている。学校の先生、学校支援本部事業ともつながり、全学年を対象にチラシを作ってもらえることになりました。

平成25年度は4月から募集をはじめ、10数名の子どもが集まりました。学校で配布するので、「貧困」等の内容はチラシには入れませんでした。最初は行政が

やっていると思われていたようです。1000円の月謝なので、口コミで広がり、参加生徒が集まり過ぎて場所が狭くなってきました。また、女子が増えすぎてバランスが難しくもなりましたね。サポーターの数にも限界があるので、途中から母親との面談を通して趣旨を説明するようにしました。いろいろな面でしんどい子たちが集まっています。助成金を活用し、まずはテキスト・コピー機をそろえ、次にボランティアへの交通費を払えるようにしました。



★専門家、当事者ではない中での当事者性

うちには特別なキーパーソンはいません。普通の人が普通の人間関係でつないでいて実施できました。私は特別な人間ではないですし、福祉のことも知らない。NPO法人の定款にも福祉とは書いていないです。そもそも素人が福祉はしてはいけないと思っていました。かつて障害者福祉の人とイベントをした経験から、当

事者でない私は、当事者の方と距離を感じていました。親が障害者の大学生は、「周りと同じには見てもらえない」「当事者になるべきではない、必要ない」と語っていました。私も子どもがいますが、今のところ勉強や読み書きの障害はない。私がいくら福祉的な発言をしても、困っている方から見ると、「お前になにが分かるんや」となるのではないのでしょうか。ただ、ある本に出会いまして、「障害の有無・経済的ハンディの当事者もあるが、学習支援の現場にいる、教室を運営していくという意味では自分ごととして当事者性はあるに違いない」と、今ではそのように理解しています。

★話を聴くことから始まる支援の場づくり

NPO活動としてプレイバックシアターをやっています。インタビューしたものをその場で即興劇として演じ直すものです。インタビューされた人は、目の前で自分の過去のしんどかったこと等が演じられていることを見ることで、自身を客観視できます。その取り組みを通して、まずは聴くことが大事だと感じていました。「何かしたい」ではなく、まず話を聴こうという姿勢です。人は「話したいもの」だと思っています。私に関わる大学



でも、大学生に何か与えるわけではなく、私が彼らの話を聴くことからスタートです。それらを通して、「場を創るには、話を聴くことから」という姿勢になっているのだと思います。LL教室も「主人公は子どもたち、2番目にサポーター、私は主人公ではない。それでいい」といつも思っています。サポーターの役割としても、福祉の仕事をしているサポーターも来てくれているし、教職を学んでいる大学生もいるし、不登校やひきこもりの経験のあるサポーターも来てくれています。一人のスキルで保っている場ではないですよね。私はニコニコして、ただ居るだけ、くらいのスタンスが良いのではないかとと思っています。

悩みどころは、親御さんは点数をあげたいとおっしゃる方がおおく、居場所が欲しいわけではないということですね。もっと勉強させてくださいという声もあります。

★サポーター（協力者）の属性や個性が 活きる組織づくり

最近では毎回のふりかえりだけでは時間が足りなくなってきました。土曜日に集まって共有の時間を設けたりもしています。その場は、みんなでしゃべりたいこ



とを話せるようにしています。子どもたちのこともさることながら、サポーターに「ここの活動に来たい！」と思ってもらえることが大事ですね。自分一人でやりたいといっても、子どもがいくらたくさん来ても、やはりサポーターさんが来ないと成立しない。市民活動センターなどでも、そこにいる人たちはやらされているものではなく、みな輝いていますよね。うちのサポーターにもそう感じ

てもらえるように関わりたいと思っています。勉強を教える人たち、おしゃべり専門の、飲み物の準備をしていただく人たち、準備だけお手伝いいただく方も、すべてがOKです。どこかで線引きして排除してはいかんと思っています。サポーター一人一人の活動への関わり方に配慮をすることで、結果自分も背負い過ぎずにできているのかなと思います。そのように活動を組織しています。活動は、到底一人ではできないですからね。

ただ、もちろんサポーターはボランティアなので、その難しさも感じています。その日になってみないと、子どももサポーターも誰が来るか分からないですから。なので、「私一人でもやる」という気持ちは必要なのだろうなと思います。「シフト組んでやればいいのか？」というアドバイスもいただきます。面倒くさいというのもあります、シフト制にしてしまうと、サポーターの負担や集まりづらさにつながります。

もっと居場所として教室を増やしたいですが、二教室目以降を実施するとなると、管理的な部分が必要になるかもしれないですね。私がコーディネートしてもいいですが、ここで経験を積んだ人に任せていいかもしれません。必ずしもこの教室と同じやり方でなくても面白いのかなとも思っています。

★子どもの変化。

家でも学校でもない場所を求める子どもたち。

活動をしていて嬉しかったのは、子どもが修学旅行のお土産を買ってきてくれたことです。頼んでいたわけではないのですが、ここに来ている大人に愛着を感じたり、「何かしたい」という思いをもってきているのかもしれないですね。

また、私ではないのですが、ある子がおじさんのサポーターを町で見かけたそうです。その場で声はかけなかったようですが、教室に来た際に「町で会ったよね？」と声かけをしてくれた。その子はいわゆるやんちゃ系の子ですが、「出会っ

て嬉しかった」ような雰囲気です。その子はもともと、女子大学生とは喋れるが、大人とは喋れない子でした。その子がおじさんサポーターと喋っていたのです。相変わらず勉強はしないですけどね。その子の関わり方や表現の仕方は不器用かもしれませんが、「この場に来たい」と思ってくれている気がします。話したい人がいたり、家でも学校でもない場所を求めているのかもしれないですね。また、LL教室をそんな存在に思ってもらえていれば、とても嬉しいことです。



★マネージャーとしての役目とスタンスについて

課題としては、これまでお家の方と話す機会がなかったことですね。事業開始の慌ただしい時期に入ってきた子どもの親御さんとは当初コミュニケーションをとる時間がありませんでした。なので、最近はコミュニケーションの時間を設けるようにしています。例えばLL教室の日が台風等のときは電話をしますし、電話に出られない時は家に訪問します。これはサポーターの役目ではなく私の役目です。私の役目はそんなに多くありません。性格が大雑把なので、あまり厳密な管理はしていません。資料準備や諸々の処理もLL教室のある月曜日にやります。火曜日から日曜日はやらないようにしています。それで支障が出ているわけでもないで、やはり無理なく続けられていることが良いのだろうと思います。ただ、私自身が自由に動きやすい仕事だからできているのかもしれない。普通の会社員だとしんどいかもしれません。

サポーター間の交流の場やイベントを通じた 緩やかなつながりづくり

サポーターは現在総勢20数名です。そのうち、いつも教室に来るのはその半数。大学生がサポーターのおよそ半分を占めるわけですが、後輩へどうつないでいくかについて話し合ってくれています。

先日療育センターの人を講師に発達障害の研修を開いた際、それに興味をもって来てくれた大学生もいました。そう考えると、学習支援の教室だけではなく、研修やイベント事もいれていかなくはないと思っています。自分たちの勉強としてもね。普段教室に来られなくても、そういう場や会議には来られるように、緩いつながりは残しておきたいですね。

交流会など色々なことを大学生に任せたりしていますが、みんなが自分の得手を生かしてやってくれています。大人サポーターと大学生サポーターの交流もそうだし、大学生サポーター同士の交流も大事なのだらうと思います。勉強会、交流会、実践報告などは良い機会になりますよね。

★多様なサポーターがいる強み

例えばですが、成人男性であるサポーターは女子生徒への関わりに配慮が必要な場合も少なくないです。教室を歩き回る女子を席に誘導するのに触れないように気をつけるとか。そんなとき、うまくその女の子を誘導してくれる女性サポーターがいるのですが、とてもありがたく感じています。体を入れて距離をとって、その子をうまく席に戻してくれます。私にはできないことなので、やはり女性のサポーターにいてもらえるとありがたいですね。

ある大学生サポーターは、「話を聞こう。どうやったらやる気が出るかな。」という点を重視していて、彼のこれまでの経験を生かして生徒への目線が上がり過ぎず下がり過ぎずのところで接してくれていて、とても助かっているなど感じています。また、あるサポーターは、見送りのときは必ず会場の外まで出て見送ります。「まだ話したそうやったけどそのまま帰ってしまった」という失敗を経て、今では、「見送りまではしっかりやろう」と。ただ、塾のように全員が並んでお見送り、というのは嫌ですね。あくまで自然に、です。ただ、生徒を帰すことが遅くならないようにはしないとね。



★今後の活動の展望について

サポーターの数には限度がありますが、理想は各学区にひとつくらいに会場を増やしたいですね。最近、学校から外国にルーツを持つ子どもの相談を受けることもあります。今後そういった子が教室に入ってくることも想定されますし、どんどん対象となる子どもの枠は広がっていくのだらう。数を増やすとか、勉強のカリキュラムを充実させるとかもありますが、なにより子どもたちにあわせて事業を動かし、変えていきたいですね。直近としては、一年後には外国籍の子どもを受け入れているだらうなと思っています。

また、最近はおコミで本当にしんどい子が来るようになってきました。サポーターとしての心構えや知識をつけていく必要があるだらうなと感じています。最近、

特別支援の子どもも一人来るようになったのですが、教室に馴染むのには時間がかかりそうです。学校経由でしんどい子が紹介されるようになってきたので、こちらとしても心の準備、勉強はしておかないとなと思っています。もちろん、サポーターがいっそう増えると嬉しいですね。サポーターのみんな一人ひとり様々に生活している中で、日々の生活プラスαとして、教室に来てもらえたら嬉しいです。

最近、市の学力向上サポーターさんとお話する機会がありました。「一つのNPOが勝手にやっている取り組み」ではなく、様々な学習支援の取り組みがある中で一つの位置づけとして認知してもらえるよう、発信していきたいと思っています。そういう意味では、例えば一年後をイメージしたときに、市のサポーターとうちのサポーターとが、同じ“子どもと向き合う者”として、ご飯を食べる等ゆるやかな交流が出来ていたらいいなと思っています。縄張り争いのように子どもを取り合うのではなく、つなぎや、隙間をどうしようと考えてことですよね。まずは、我々が横でつながっていくことが大事だと思っています。



みんなで調理
をしました！

★子どもを地域で育む取り組みのポイント★ ～滋賀県内の活動者による座談会から～



日 時：平成27年1月14日（水）
9時30分～11時30分
会 場：G-NETしが 研修室B

参加者

- ①犬丸智則さん（守山市健康福祉政策課 係長）
- ②眞弓洋一さん（東近江市社会福祉協議会 地域福祉課長）
- ③金子泉美さん（東近江市社会福祉協議会 地域福祉課主任主事）
- ④井ノ口浩士さん（大津市社会福祉協議会 地域支援グループリーダー）
- ⑤柴田雅美さん（NPO法人Links 代表理事）
- ⑥篠原岳司さん（滋賀県立大学 人間文化学部人間関係学科 准教授）
- ⑦谷口郁美（滋賀県社会福祉協議会 地域福祉部長兼滋賀の縁創造実践センター所長）
- ⑧日野貴博（滋賀県社会福祉協議会 滋賀の縁創造実践センター主事）
- ⑨森井良麿（滋賀県社会福祉協議会 滋賀の縁創造実践センター研修生）

活動のインタビューを実施した方々にお集まりいただき、地域の中で子どもを育む取り組みについてのポイントや思いを、ざっくばらんに語っていただきました。次ページよりその一部を掲載します。

座談会



谷口（司会進行）：本日はお集まりいただき、ありがとうございます。今日は、地域の中で、しんどい家庭の子どもや世帯を支えたり見守ったりする活動が今後どうなったらええんかなと、様々なお立場からお話しいただけたらと思います。

どんな子どもたちが来ていますか？

柴田さん：関わる中で「実はひとり親で経済的にしんどい状況にある」と知ることもありますが、最近発達支援のルートで活動につながる子どもが多いですね。発達障害や不登校、いじめの問題等、子どもの問題は複合的になっており、活動の中で簡単に対象を切り分けられなくなっていると感じます。



柴田さん
(NPO法人L i n k s)

眞弓さん、金子さん：うちは市の窓口から子どもがつながりますが、そもそもの活動のはじまりは市の生活保護担当職員への聞き取りからでしたね。「子どもが地域で孤立している状況に気付いても、その孤立感に対して制度では対応できない」という声を聞いていました。そこで社協としては、「子どもたちの社会的な孤立をなんとかしよう（＝居場所づくり）」と考え、活動をはじめました。来ている子どもたちは自尊心や自己肯定感がなく、「どうせ私なんて…」という言葉を使います。子どもたちがちょっとでも前を向いたりできる身近なモデルとして、うちでは市内在住の大学生のお兄ちゃんお姉ちゃんにボランティアとして関わってもらっています。

実はボランティアをお願いしている若者にも地域で活躍する場がないんです。地



眞弓さん（左）、金子さん（右）
（東近江市社会福祉協議会）

域に愛着があっても、地域のイベントでの役割がなかったり、就職の時期が来ても仕事が無かったり、どんどん市外、県外に出ていってしまいます。この活動を通して、大学生がアルバイトを空けてまで活動に参加している姿を見ると、彼・彼女らにとっての居場所にもなっているのだと思います。もちろん私たち社協にとっても気づきの場になっていま

す。うちに来ている不登校だった子どもが学校に通い始めて、別室登校で学校での居場所を見つけ出したりもしていますが、子どもたちはまさに縦割りの中に置かれていて、学校での取り組みと私たちのような地域での取り組みがつながるようにしていきたいと思っています。

井ノ口さん：うちの二つの取り組みも、学習支援だけでなく居場所づくりも中心ですね。トワイライトステイについては、来ている高校世代の子たちも変化してきて、大学生のお兄ちゃんお姉ちゃんに関わる中で「大学に行ってみたい」という声が出たり、勉強は難しいけども、働くことを考えるうえで「活動日に休みももらえる仕事ないやろか」と考えていたりします。小学生は大人への試し行動もあり、難しさもありますが、家族の変化も起きてきています。小学校への送り迎えをはじめたり、親も少しずつ前を向いているのだと思います。

寺子屋プロジェクトはまさに地域から出てきた活動ですが、やはり「孤立」が一番の問題やと思います。貧乏ではないけども、両親共働きで朝ごはんを食べていない子どもの参加もありました。活動を通して、孤立のこと、お金だけじゃない貧困問題を地域の方が感じて、関わってくださる方がどんどん増えてきているのは嬉しいことです。また、「うちの学区でもしてほしい」という学校からの声もあり、地域と互いに寄り添いあうように変化が出てきているのも大きいかなと思います。



井ノ口さん
（大津市社会福祉協議会）

学校や行政との連携と地域での活動について

谷口：学校や行政から様々なお願いごとも増えてきていると思います。関係機関との関わり方や連携、そして地域での活動はどのようになっていくのでしょうか。

篠原さん：学校の先生たちも相当の悩みを抱えている時代になっています。教育分野の行政的位置づけは独特で、一人の子どもを総合的に支えようと思っても、担当部署を乗り越える難しさを現場の職員も語っています。その中で、いかに分野横断的に取り組めるかを考えている行政職員も少なくありません。社協やNPOなど、地域の様々な団体・法人は、そういった行政のお金を使いながら、縦割りの支援を乗り越える主体として、その力はとても大きいと感じます。活動とネットワークを通じて、目の前にいる子どもたちの姿を根拠に、制度に訴え続けていくことが大事だと思います。



篠原さん
(滋賀県立大学)

柴田さん：先ほどの話の中で、貧しくはないですが孤立している子どもの話がありました。「経済的に塾に行けない子どものための学習支援」とすると、そういう子が来られなくなります。そのためうちは、今のところどんな子どもも受け入れています。発達支援の子どものニーズの話をしましたが、今後どういう方向に進むかはまだ分からないですね。

眞弓さん：「居場所」という言葉には様々な解釈がありますが、うちの場合は「生きていくための力をつける場」と認識しています。その力の一つが学習かもしれないし、大学生という身近なモデルと出会うことかもしれません。「コップの洗い方、お米のとぎ方の分からない子どもたちに何を用意できるだろう」と考えると、それに対応できる制度・サービスはないのです。

学校の先生も、子どもの変化を目の当たりにしています。子どもたちは自分に関心を持たれることにとっても反応するので、子どもたちを認める大人が増えること自体にとっても価値があります。学校の先生の中にも、「学習支援が唯一自分を出せる場になっている」と感じておられる方もいます。ただ、「学校で同じところを目指しても上手くいかない」とも感じておられるようです。子どもを真ん中において、みんなでそれぞれの役割で関わられるようになりたいと思っています。

また、親の変化もあります。この年末年始に冬休みの特別活動を実施した際、これまでこの取り組みに理解を示しているのが分からなかった保護者が、子ども

を迎えに来て「ありがとうございました。また明日もお願いします」と言ってくれました。親も含めて、一人ひとりを見守っていく場所があっていいのではないかと思います。

ただ、地域や民間は「放っておけない」からやっているのであって、行政が「お金がない」「人手が足りない」から「地域の人をお願いします」となると、どんどん子どもたちにとって安定して通い続けられる居場所がなくなっていくのだろうと思います。

犬丸さん：取り組みを始めるにあたって僕が思っていたのは、「行政は逃げたらあかん」ということでした。この取り組みは当然行政がやるものであり、ただ行政だけではできないので、色々なところと協働してやっていくことに意味があると思っています。実際、取り組む中で行政課題も見えてきました。ヒントがたくさん転がっ



犬丸さん
(守山市)

ている取り組みです。うちの対象は、はじめは中学1年から中学3年まででしたが、子どもたちを見たり、ボランティアの大学生の声を聞いたりする中で、小学4年から高校3年生まで、またひとり親家庭まで対象を広げるなど、必要に応じて場を変えてきました。子どもたちも、大学生ボランティアだから話す内容もあって、そのことを聞いて家庭の状況が見えたり、生活保護担当職員に橋渡しをしたりできます。子どもが家に帰って親にこの場の話をする場面もあるようで、家の中でのつながりが深まっているとも感じます。

気づいた人ができることから一生懸命やってみること

谷口：関係機関との連携を通して、親との関わりや支援について、または世帯の状況を知ることについての話が出てきました。この点についてはいかがでしょうか。

柴田さん：私たちは親との関わりがあまりありません。もちろん親御さんとのコミュニケーションとして多少は必要だと思いますが、あまりご家庭の事情まで踏み込んでよいものかというのは、民間団体の立場から感じます。

眞弓さん：「家庭のことを知る」というのは、この活動の絶対要件ではないですね。

谷口：そう思った方がいいですね。絶対に親と関わらんといかんとか、「ここまでやらなアカン」となると、「それはできません」となってしまうですね。

柴田さん：私たちの取り組みに参加している福祉の専門家は一人です。「素人でもできることを一生懸命やる」ということが大事だと思って活動しています。

犬丸さん：「素人でもできる」というのはキーワードですよ。うちの取り組みも、みんなで見えを出し合いながらやっています。みんなが一生懸命にやっている中で、つながった地域の方からお菓子を提供いただけるようにもなりました。分からないなりに考えてやれることも、この活動の醍醐味です。

井ノ口さん：寺子屋プロジェクトは、どんな家庭環境の子どもが来ているかについて、おそらく地域の方は把握されていません。取り組みを通してしんどい子どもを発見できればという具合で、まずは色んな子どもが集える居場所なのだろうと思います。トワイライトステイでは、スクールソーシャルワーカーに家庭と学校をつなぎながら支援していただいています。が、「社会に送り出す」なんて簡単に言えますが、とても難しいことです。子どもたちが学校を続けることも難しいのが現状です。

学習の支援のみではない学習支援

谷口：学習支援事業と聞くと「ただ学習を支援してくれる場」と思われがちですが、居場所であることや、そもそも一人ひとりその子が大事ということですね。

柴田さん：ただ、実際は「居場所はいらない。点数をあげてほしい」という親御さんも少なくないですね。

井ノ口さん：学習の支援であれば行政や学校がしている取り組みがある中で、同じではないところが社協の出番かなと思い、このように活動しています。



金子さん：勉強ができることで子どもの自信につながり、その子の一歩につながることは様子を見ていて感じるの、場の在り方として、「居場所」と「学習支援」とで揺れ動きます。でも、やはり子どもたちが来てくれるだけで嬉しいものです。

犬丸さん：揺れ動くというのはうちもそうです。ただ実際、「うちは勉強だけではない」ということを保護者の方に伝えているのですが、「何がなんでも子どもたちは行きたがる。どんなことをしているの？」と保護者の方から言われます。勉強は、子どもたちが意欲のある時に頑張ってくれたらいいです。僕の思いとしては、色々なボランティアさんがいるので、子どもたちにはそういう方々を見てほしいなと思います。大学の話や就職活動の話聞いて、夢がぼやっとみえたり、「こんな大人になりたい」とか、そういうことを肌で感じてもらえることが一番かなと思います。

井ノ口さん：そもそもトワイライトの場合、勉強どころでない子どもが多いです。他方、今の社会を考えると、今の子どもたちは家庭学習も含めて教育ですね。つまり、お金の有無を別にして、孤立している子どもたちは宿題や長期休みの提出物ができない。私らの時代に比べて量も多くなっています。

みんなで「この子にどんなふうに育てほしいか」を考える 子どもを認める大人の仲間づくり

篠原さん：教科書以外のテキスト代も家庭の負担ですよ。学校の果たす責任について、このような地域の実践から発信する意味は大きいと思います。やはり一人の子どもを見ていく際、「誰かにお任せ」という形よりは、一緒にやることで自らの課題にも気づきます。「教育」という言葉にとられるのではなく、「子どもにどんなふうに育てほしいのか」という願いを発信していくことなのだと思います。



眞弓さん：大人として、「駄目な子ども」と烙印を押すのではなく、子どもを全人格的に捉えられる大人の仲間づくりをしていきたいですね。子どもを認める大人がいないと、どんどんその子たちの居場所がなくなる。だから、その子たちが学

習支援の場で見せている「頑張っています」という学校では見せない様子を学校の先生にも伝えます。その情報を子どもたちとの関わりに活かしてくれている先生もいますね。

谷口：子どもにとっては学校も学習支援の場もそれぞれ生活の一場で、切り分けられるものではないですよ。「大人の仲間」という言葉が出ましたが、そのあたりはいかがでしょうか。

柴田さん：少なくとも行政や学校等、様々な場面で子どもと関わっている大人が話し合える場があるといいですね。

犬丸さん：学校には、その都度共有の場を持たせていただき、その際僕らが見ている子どもたちのイメージをすべて伝えていきます。そのイメージの共有が、教育や支援のミスマッチを埋めることにつながるのではないかと思います。

日野：公的な場だけでなく、民間の場も増え、それらが「大人の仲間」としてネットワークをつくれたら、より子どもや世帯の状況にあわせた場につなげる可能性も出てきます。私自身、ボランティアとして関わる中で、ミスマッチやジレンマを感じる場面もあったので、様々な場ができネットワークの中で支援する可能性が出てくることは、とても嬉しいことと感じています。



「社会の場」として・・・大人もしんどさを出せる、
楽しみがある活動に

井ノ口さん：やはり「子どもにどう育ててほしいか」という思いや視点が大事だと思います。ただの「仕事」として子どもたちと関わってしまうと、うまくいき

ません。何より活動している我々も楽しいことが大事ですよね。一緒に子どもと考えたり、何かしたりすること、「一緒に前を向こう」という姿勢が子どもや親に伝わること等、そういうことが大事だろうと感じています。

眞弓さん：仕事としていくのであれば、一層のこと関わる大人は「しんどさ」や「弱さ」を出した方がいいですね。非日常で非社会的、保護や擁護のためだけの空間では子どもの社会性は育まれません。無理に強がったりせず、大人が迷いながら関わる姿が、子どもたちにとっては居心地がよいということもあると思います。



また、様々な大人の仲間が関わることで、子どもたちが社会にある様々な役割や仕事を知る機会になります。その関わり自体が社会を知る場ですし、子どもたちが将来の職業を考えるきっかけになればいいですね。

谷口：その場自体が「社会の場」なんですね。ぶつかり合うこともあるし、自分を出し合える場で、社会的な付き合いができる場とも言えるかもしれません。

眞弓さん：だから無理なく、みんなで活動を続けられます。それぞれができる範囲で、できるやり方で。様々な形で既に実践はありますが、実はモデルは要らなくて、「気づいた大人が気づいた人なりにできることをまずやってみる」ことが大事ではないかと思います。

今日の話の中でも出ましたが、支援をしている我々も学びや気づきが多く、やりがいや楽しみもあるという前向きな仕事は、実は珍しいのではないかと思います。

谷口：守山市の場合は、行政が気づいて、できる形を探して今の形になってきたわけですね。

犬丸さん：行政にとっても面白さややりがいのある仕事です。子どもや保護者と直接関わることを通して、子どもや親の成長や変化が見え、「こんなことができるかも」と一緒に知恵を巡らす中で僕自身も成長させてもらっています。「あの人に聞いてみようか」と動く中でネットワークができ、そういう楽しみもありますね。先日もしばらく学習支援に来ていない子と銭湯に行く企画をしたんですけど、そ

の時も「試しにやってみようか」という感覚でした。やってみることで「じゃあ次はどうしよう」と考えられるので、そういう感覚でいいのではないかと思いますね。

谷口：ボランティアで無料塾、ただ講師をやらされているというものは、全くの正反対ですね。そこからは、活動する喜びが湧いてこないように思います。

日野：子どもと一緒にこの活動の場をつくっていくというか、そういう感覚をもてると楽しく続けられると思います。

地域の方の見守り 「何かを教える」「しないとイケない」ことのない居場所を

谷口：これまで、関わっている大学生や若者の役割の大きさの話が多かったですが、地域のおっちゃんやおばちゃんはどうでしょうか。

金子さん：会場でお借りしている所の管理をされている方は、いつも見守ってくださっています。先日クリスマスイベントで鍋をしたのですが、「いつもお世話



になってるから」と子どもたちが鍋からよそって持っていったシーンがありました。普段その地域の方は、雨が降ったあとに子どもたちの自転車を拭いてくれたり、「柿ぎょうさんもらったし、食べて」と子どもたちに持って来てくださったり、そうやって大人とのつながりが自然にできているというか、サポートしていることが子どもたちにも自然に伝わるというか、なんか良い雰囲気やなって思います。

眞弓さん：その地域の方と話していると、「ほんまにあの子ら家に問題があるの？ 良い子ばかりやがな」と言っています。たいそうなことをしてくれているわけではないですが、その場に居合わせている大人が色々な配慮をしてくれているのは、子どもたちに良い影響を与えていると思います。

谷口：大学生や若者にボランティアをしてもらうことが絶対というわけではないということですね。

篠原さん：Link sさんの場合も、多様な世代や立場の方々がボランティアで関わられていますよね。交流を通して互いの気づきがあったり、活動も柔軟になっていくことも考えられますが、いかがですか？

柴田さん：地域の方がボランティアとして来られる場合、「何かを教えよう」と思って来られると、結構心をくじかれて帰られることがあります。ある塾講師経験のあるサポーターさんも、当初は自分の経験で勉強を教えようとしてもうまくいかず、「とてもしんどかった」と言っています。今では、「いい意味で、いい加減でよい」と自分なりに解釈され、「楽しくなってきた」と話されています。

また、サポーター同士の飲み会を、大学生も大人も楽しみにしています。地域の方からすると、「若い人と飲めるなら、3カ月は若返る」って（笑）



谷口：普通の社会の構図というか、色んな人がいるのがいいんですね。何か教えようと思ったら、失敗するというか。

真弓さん：「ここまでせなあかん」とか、絶対というものはないと言いましたけど、「子どもたちに何かを教えよう」というのは活動に持ち込まない方がいいでしょうね。そうしてしまうと、子どもたちのできないところばかりに目がつくと思うんです。そうではなくて、「しなければならぬ」ということがない「居場所」と思えば、子どもたちの1個ずつの変化に目が行き、いいところ探しの関わり方ができるようになるのだと思います。

谷口：小さな変化を出し合って、お互いに喜びあうというか、そういう意識でできるといいですね。

では、まだまだ話し足りていない方もいらっしゃると思いますが、これにて座談会を終了します。ありがとうございました。

全員：ありがとうございました。

★5つのポイント★

①子どもの孤立に焦点をあてた取り組みを

子どもたちは「ひとりぼっち」の生活の中で、様々な体験や人との関わりが不足し、生きていく力をつけられず、負の感情を蓄積していきます。しかし、子どもの「ひとりぼっち」は、制度では解消されません。「この子をひとりぼっちにさせない」取り組みをしていきましょう！

②気づいた人が気づいた人なりにできることから

「あれも考えなきゃ」「これもしなきゃ」というものはありません。「この子に私ができることってなんだろう？」からスタートし、自分に無理のないように「まずやってみる」ことが大事です！

③大人の仲間づくり

「子どもにどんなふう to 育てほしいか」という思いを共有し、立場は違っても「一緒にこの子を育てよう」と考える大人の仲間づくりをしましょう！

④社会の場であること

子どもだけでなく、活動者である大人もまた、楽しさやしんどさを出せる1つの「社会の場」であることで、子どもにも良い影響があります！

⑤「教えよう！」は△

「何かを教えよう！」という気持ちで活動をする、様々な困難に直面します。「しなきゃいけないことのない”居場所”と捉えることで、活動にも無理がなく、そして子どもの良いところを発見しやすくなります！



まとめ



★「まとめ」執筆者紹介★

篠原岳司氏（滋賀県立大学人間文化学部人間関係学科 准教授）

専門は教育行政学、教育経営学。札幌での大学院時代に土曜日の子どもたちの居場所づくりと学習のサポートを始め、不登校やひきこもりなど困難を抱える子ども・若者の支援に関心を持つ。滋賀県立大学着任後は、彦根市社会福祉課との共同研究によって子どもの貧困の連鎖を食い止める様々な支援体制づくりに取り組んでいる。

「子どもは真っ当に育てて欲しい」、未来ある子どもたちにそのような純粋な願いを抱く方は多いと思います。しかしながら、いつの日からでしょう、乳幼児や児童への虐待、学校生活におけるいじめ被害や人間関係のトラブル、学びからの逃走、インターネットによる被害など、多くの子どもたちは日常生活や学校生活の中で様々な困難に見舞われています。子どもたちを襲うトラブルの数々をあげたら枚挙にいとまがありません。傷つき、悩み、苦しむ子どもたちが身近にいて心を痛めている方々もきっと少なくないことでしょう。私たちの社会は、いつの頃からか子どもたちにとって過酷な生活環境を作りだしてしまっています。

その中でも、現代の日本社会において極めて見えにくかった子どもたちの困難がありました。それが、本冊子で課題として取り上げてきた「子どもの貧困」の問題です。高度経済成長を成し遂げ一億層中流の福祉国家を建設した日本社会においても、残念ながら貧困は限りなく見えにくいまま存在してきました。2014年の統計では、貧困の中で暮らす子どもの割合が16.3%と過去最悪の状態を示しており、健やかであるべき子どもたちの育ちに、貧困がますます深刻な困難をもたらしてきています。

本冊子で特に問題としてきたのが、経済的な困窮状態に起因する、子どもたちの社会関係資本と文化資本の未発達です。社会関係資本とは、頼りにできる親や親戚、気のおける友人や先輩後輩がいるなど、その人の人生を豊かにしてくれる人間関係を意味しています。そこには「あいつがいるから自分も頑張れる」などのライバル関係のようなものも含まれるでしょう。文化資本とは、身近で音楽や美術に触れたり演劇を鑑賞する機会があったなど、人類が築き上げてきた様々な文化を直に体験することで身につく人となりや構えのことです。問題

は、この二つの資本が経済的な困窮によって損なわれやすいこと、そしてそれらが損なわれることでますます経済的な困窮状態から抜け出す機会を得がたくなることです。子どもの貧困の問題においてもっとも懸念されている問題こそ、社会関係資本と文化資本の不足によって引き起こされる将来的な貧困の連鎖なのです。

本冊子で紹介される4つの実践は、どれもがこの貧困の連鎖を食い止めようと社会関係資本や文化資本の形成に取り組まれているもので、極めて価値の高い取り組みだと思われます。中でも、各実践が掲げる「学習支援」という看板は、学歴社会の中で子どもたちの学び直しと進学を支えていくことの重要性を掲げるものですが、よく事例を見ていくとそれ以上の意味を持っていることに気づくことができるでしょう。つまり、学習支援と言いながら「学習」が活動の最終的な目的ではなく、学習支援を入り口にした人間関係づくりが目指され、「人っていいなあ」という実感を持って、様々な大人やお兄さんお姉さんたち、同世代の友人たちとつながっていく機会をもたらすことが目的となっているのです。そこでは、学習をサポートされる子どもたちが、気がつけばサポートする大人たちとのつながりを大切に感じ、楽しく、あたたかな日常が作られています。貧困の中で我慢が当たり前となり過ごしている子どもたちにとって、何かを人に求めたり誘ったりと他者に何かを求めていく行為は、もしかしたら学校や家庭ではなかなか見せることのできない素直な子どもの姿かもしれません。学習支援の現場において、そうした子どもからの問いかけやアクションが出てくる中で、「学習支援」の取り組みは皆にとって居心地のいい「居場所づくり」の取り組みへと発展していくのです。

このような「居場所づくり」の活動を通じて生まれてくる支援者のやりがいや喜びにもぜひ注目をしたく思います。それぞれのご報告や座談会の様子から、活動される方々が人とつながる楽しさや地元で新たな仲間ができていく喜び、さらには中学生たちを支える中で自分も元気になっている、そんな実感が語られています。支援側も人とつながり元気になる、そうした報告はこれから子どもの貧困の問題に取り組みたいと思う方々を大いに励ますものではないでしょうか。本冊子を通じて、滋賀県内の様々な地域において、子どもたちの学びと成長を支えていく取り組みがますます広がっていくことを切に願います。そのことによって、大人も子どもも関係なく人と人とが支え合い、地域に新たな絆が生まれ、誰もが生きやすいと感じられる地域福祉が活性化していくことを期待したいと思います。

滋賀県立大学 人間文化学部人間関係学科
准教授 篠原 岳司

地域で始めたい！子どもの学習支援・居場所づくり活動 ～滋賀県内の取り組みから～

2015年3月30日 発行

【発行者】

滋賀県

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会

<問い合わせ>

滋賀の縁創造実践センター事務局（滋賀県社会福祉協議会内）

（住所）〒525-0072 滋賀県草津市笠山七丁目 8-138

（電話）077-569-4650 （FAX）077-567-5160

（メール）enishi@shigashakyo.jp

（ホームページ）<http://www.shigashakyo.jp/enishi/>

（フェイスブックページ（QRコード））・・・・・・・・・・⇒



【印刷】

社会福祉法人 いしづみ会

【編集協力者・団体（敬称略）】

守山市健康福祉政策課

社会福祉法人大津市社会福祉協議会

社会福祉法人東近江市社会福祉協議会

NPO法人L i n k s（彦根市）

篠原岳司（滋賀県立大学人間文化学部人間関係学科 准教授）

地域で始めたい！

子どもの学習支援
居場所づくり活動

～滋賀県内の取り組みから～